

書評：李東泉『青島の都市計画と都市発展研究(一八九七～一九三七)：中国近代における現代都市計画の誕生と発展に関する検討』

高, 文婧
九州大学大学院法学府：修士課程

<https://doi.org/10.15017/1440964>

出版情報：政治研究. 60, pp.293-301, 2013-03-31. 九州大学法学部政治研究室
バージョン：
権利関係：

書評

李東泉『青島の都市計画と都市発展研究（一八九七〜一九三七）——中国近代における現代都市計画の誕生と発展に関する検討』

李東泉『青島城市規劃与城市發展研究（一八九七〜一九三七）——兼論現代城市規劃在中國近代的產生与發展』（中国建築工業出版社、二〇一二年五月、六十二〜三二頁）

高文婧

はじめに

二一世紀の中国が重大な課題として直面している都市化において、現代都市計画に関する研究が注目を浴びつつある。とりわけ近年、日本や中国において、青島の都市計画や都市政策の歴史に対する関心が高まっている。そうした中で、本書『青島の都市計画と都市発展研究（一八九七〜一九三七）

——中国近代における現代都市計画の誕生と発展に関する検討』は、一八九七〜一九三七年の青島の都市計画の事例を中心に、中国近代における都市計画の誕生と発展を分析した最新の研究成果の一つである。

本書の主たる目的は以下の二点である。すなわち、まず都市計画の下で近代都市の発展の歴史を通じて、都市計画と都市発展の弁証法的な関係を分析することである。次に、青島を事例に、中国近代の社会的背景と結びつけながら、中国近代都市計画に関する思想形成の歴史的背景を検討することである。従って、本書は中国近代における都市計画や都市政策についての研究だけでなく、今日の都市化の計画と発展並びに都市政策に関心を抱く読者にも大いに示唆を与える著作である。

評者は政治史専攻であり、二〇世紀初頭の青島における日植民地政策に関する研究をしており、ここでは主に政治史及び植民地史研究という視点から論評を行いたい。さて、以下では、本書の構成と内容を概観しつつ、本書の特徴と今後の課題について論述させていただく。

一 本書の構成と内容

本書は、主に序論、五つの章及び終章からなる。本書の五つの章では、「青島」という都市の誕生の要因と条件を捉えつつ、一八九七〜一九一四年及び一九一四〜一九三七年の二段階に分けて青島の都市形成と発展についての説明を行っている。

序章では、研究背景と研究動向を詳細に分析した上で、本書の課題が設定されている。まず、都市発展に関する歴史研究の必要性を訴えつつ、「都市計画」という専門領域の構築の必要性を主張している。

そのうえで、研究対象としての一八九七〜一九三七年の青島が、中国近現代都市発展史及び計画史のなかで位置づけられている。特に、都市計画史において一八九七〜一九三七年の青島を研究する意義として、以下の四つが挙げられている。すなわち、①青島は、中国近代において完全に都市計画に沿って発展してきた現代都市の典型であること。②青島は、都市計画に沿って確立した唯一の都市ではないが、中国における現代都市計画の実験において最も代表的な事例であること。

③青島が市政進歩の指標として行政独立体系を確立したこと。④一八九七〜一九三七年の青島都市計画と発展の歴史は、完全性、独立性及び連続性をもつこと。

それにもかかわらず、青島の都市計画史の研究は不十分であり、中国近代都市計画史における青島の位置づけが未だに重視されていないという現状が強調されている。それに加え、従来の中国都市計画史に関する研究は、主に古代史及び中国建築史にとどまっていると指摘されている。しかも、今まで研究対象のほとんどが上海であり、都市計画という専門分野にとどまり、中国の社会発展の背景及び他の地域研究との関連が未だに視野に入ってなかったと指摘している。

その上で、序章では、研究の範囲及び時代設定がなされ、「青島」「膠州と膠州湾」「租界と租借地」などの定義が再検討されている。本研究は対象時期を中国近代に設定しているが、現代都市計画の中国近代史における位置も探求されている。

以上の検討を踏まえた上で、本書は以下の二つの分析視角から五つの章を展開することが明示される。すなわち、一つは一八九七〜一九三七年の青島の都市計画と発展の歴史から

の検討である。もう一つは青島の都市計画の誕生の背景、西
欧列強の経験の導入及びその経験に対する中国人の研究と実
験といった青島の四〇年間の歴史から、中国近代における現
代都市計画の発展過程を徹底的に検討することである。

第二章「青島の都市の誕生に関する要因と条件」は、青島
という都市の誕生の時代背景、占領前のドイツの事前調査及
び青島の地理的位置の重要性について明らかにしている。

著者は青島の地理的優位が都市発展の基礎的要素であると
強調している。ここでは、膠州湾の港湾条件が青島の地理的
位置と相まって、青島が現代都市として誕生する客観的条件
となったことが指摘されている。

欧米列強の利権獲得をめぐる植民地競争という中国の国内
外の情勢の下で、清朝政府は青島を海防基地として設置した
に過ぎなかった。その一方で、ドイツ側は軍事かつ経済面に
おいて膠州湾の地理的優位を重要視した上で、占領前に初期
の都市計画を作成して一八九七年一月一四日に膠州湾を占
領することに決定した。以上のように、膠州湾をめぐる中独
の異なる認識に着目して分析がなされている。

そこで、中独の異なる膠州湾の認識は以下のように帰結し

たと本章で論じている。まず、膠州湾の重要性について、清
朝政府が専ら外国侵略に抵抗する立場から認識したために、
膠州湾の軍事的重要性にしか注目しなかった。一方、ドイツ
は、世界的かつ拡張的な視点から膠州湾を認識し、しかも当
時世界の先進的な生産力及び科学の水準を代表していた。結
果的に、中独の認識のギャップは、一九世紀末の中国と西洋
の社会発展の水準の差の現れであった、とされる。

著者は一九世紀末における膠州湾をめぐる中独の認識に
よって青島の発展の道が異なると主張している。つまり、
著者の見方によれば、中国封建統治の社会条件の下では青島
はただの海上の重鎮に過ぎず、西洋の工業国からすれば無
限の経済価値があつたとされる。

第三章「現代都市計画の「移植」と青島の都市形成（一八
九七―一九一四年）」は、ドイツの青島都市計画の背景と内容
及び都市形成の過程における都市計画の機能に着目して論じ
ている。

まず、西洋現代都市計画の誕生及び一九世紀後期ドイツに
おける都市計画の発展に伴い、ドイツの青島都市計画が誕生
したと分析されている。それに加えて、社会改革思想、政府

の介入及び法制体系による保障といった西洋都市計画の思想的背景についても言及されている。さらに、ヴィルヘルム二世の「世界政策」、海軍省の「模範植民地」及びドイツ民族の「ロマン主義的な普遍主義」が青島の都市建設の指導的な思想を成したと論じている。

ここでは、青島という都市がただ自発的に形成されたのではなく、現代都市計画の下において形成されたことが強調される。その際、ドイツ占領期の都市計画の内容を詳細に概観した上で、ドイツの合理的な都市計画が青島の都市形成に寄与したと述べられている。

ドイツの青島都市計画について著者は、以下の四つのポイントに着目した上で分析を行っている。すなわち、①ドイツが青島を極東における自国の軍港かつ商港として都市建設に着手した点。②都市設計図に基づいていたように、青島都市計画の構想が現代都市計画の特徴をもつ実用的な計画案である点。③都市計画が都市発展に関与することによって、計画が政府の機能として運用された点。④土地政策が都市計画の実施の制度的保障として利用された点。

さらに、著者は、ドイツが青島で当時の資本主義国家の先

進的な水準を代表する現代都市計画を完全に実現したと評価している。しかし、著者は、青島は現代的な意義をもつ都市計画システムの雛形として形成されたと認識しながらも、植民地支配の本質についても言及している。すなわち、著者は、一八九七〜一九一四年に青島の都市計画は近代化の基盤を提供すると同時に、マイナスの影響をもたらしたといった二面性を強調して、結論づけている。

第四章「青島の都市の成長と整備（一九一四〜一九三七年）」は青島の一九一四〜一九三七年の歴史を概観した上で、都市発展の主観的、客観的原因を分析しつつ、都市の成長過程及びその過程における都市計画の継受と発展に着目して検討している。

一九一四〜一九二二年の日本占領期において、工業の投資が大量に青島に押し寄せたが、青島と山東の「民族商工業」に強力な打撃を与えたとマイナスの一面も指摘している。一九二二〜一九二九年の北洋軍閥の時期に、青島の近代化建設を促進しようといった動きがあったが、不安定な政局のため、望ましい結果がでなかったと述べている。一九二九〜一九三七年の南京国民政府の時期に安定的な国内環境と共に政策決

定者の振興によつて青島の都市機能が健全になり、全面的な発展期を迎えたとされる。

以上の発展過程を分析した上で、一九一四―一九三七年に、充実した都市基盤及び外国工業資本の導入によつて、青島は健全な都市機能を果たすとともに、自力で発展する道を歩みだしたと論じている。一九一四年以降、ドイツの都市計画体系は政府機能及び関連法規などにおいて現代都市計画に対する中国人の意識に影響を及ぼしたとされる。特に一九三〇年代に、欧米の現代都市計画思想に類似した思想が青島に芽生えたと評価している。

以上から著者は、この段階で現代都市計画はドイツ植民地支配によつて強制された「文明」から、青島都市自身の発展ならびに中国社会背景の变革を通じての中国人の自主的な選択へと移行したと主張している。

第五章「一九三五年の青島市施行の都市計画案」（以下では「一九三五年案」と略す）は、この一九三五年案を中国人初
の青島の都市全体計画として取り上げた上で、その社会背景及び内容について概観し、一九三五年案の先進性と制約性に
着目している。

ここでは、まず、国家現代化建設と都市自身の発展の要請の下で、一九三五年案が制定され、「青島が百万の人口に適合した合理的な都市になる」ことを目指したものと論じている。そもそも、一九三五年案は、一三章からなる。大きくは、都市計画の目的、作用、範囲、予測及び原則を分析した第一部と都市の機能地域に関する計画内容を扱った第二部と計画の実施措置に着目した第三部からなる。

以上から、著者は一九三五年案を比較的完全でかつ斬新な計画体系をなした計画案と評価している。一方で、社会発展の現実とのずれなど、理想主義的な一面も見られると指摘している。著者は、一九三五年案の科学性及び合理性について、以下の五つの点を指摘している。①都市計画の機能に関して比較的正確な認識があること。②華北、黄河地域乃至世界から青島を位置づける地域意識があること。③全体意識及びシステム理論があること。④制度保障の意識があること。⑤一定の社会公平意識があること。こうした一九三五年案にある合理的な部分がそれ以降の都市計画に応用されることになったとされる。

その一方で、社会発展の現実及び戦争などの原因によつて、

一九三五年案は設計図の段階のみにとどまり、当時は実施されなかった。

第六章「青島の都市計画と都市発展研究に関する歴史的経緯と示唆」は、前五章の研究に基づき、青島という事例を通じて都市発展に向けての都市計画の役割に関する歴史的経緯を検討した上で、歴史研究が今日の都市計画に与える示唆について言及している。さらに、現代中国における都市計画思想の形成に影響を及ぼした歴史的要因についても明らかにしている。

青島の都市発展史は中国諸都市の現代化過程、すなわち外国の思想の浸透から中国自身の実験に至るまでの過程を全面的に反映しているとされる。その際、著者は都市発展を都市計画に還元することはできないが、都市の発展法則に即した計画が都市発展を促進させた面は否定できないと論じている。それに加え、著者は、青島における都市計画と都市発展の関係について明らかにした上で、都市計画の認識、方法及び実施などにおける歴史的意義を述べている。

さらに、著者は、従来の都市計画では重要視されていない都市計画の思想に着目し、以下の二点において、その思想に

影響した歴史的基礎について分析を行っている。一つは、都市計画という専門分野の独特な歴史的発展の軌跡によって形成された独自の歴史的基礎についてである。もう一つは、この専門分野の発展過程の中で、国家の歴史の発展過程がこうした専門分野に与えた影響によって形成された普遍的ともいえる歴史的基礎についてである。

こうした歴史的基礎を検討する際に、著者は、以下の五つの論点を提示している。すなわち、①外力によって促進された近代都市の異常な発展過程を通じて、工業化がもたらした現代都市の「表面的な文明」にしか着目しないために、都市計画の認識についてのずれが生じたこと。②中国現代都市計画にはその後の発展過程において現代都市計画の本質についての完全な認識がなかったこと。③中国近代社会の発展過程において、現代都市計画の社会改革思想が理想化の様相を呈していること。④国家主義が都市計画の政府関与という思想の強化に影響を及ぼしたこと。⑤中国近代において、地方自治の不健全及び法制基盤の欠如によって、中国現代都市計画には制度的環境が整っていないかったこと。

以上の考察を踏まえて終章では、三つの結論に沿って、本

書の内容が整理された上で、今日の都市計画の改革をめぐる展望が述べられている。

ここにおいて、著者は従来の都市計画が机上の空論に過ぎず、完全な計画体系を成していなかったことを指摘している。その上で、都市計画の改革は社会制度及び経済基盤などの改革がおこらない限り、実現し得ないと主張している。しかしながら、今日の中国では、改革に向けた経済の基礎条件が備わっているものの、理想的な政治、社会の基礎が未だに形成されていないと述べている。

こうした中国の現状を踏まえた上で、都市計画の方向性を把握し、万全な準備で改革に向かうべきだと今後の展望を述べて、本書は締め括られている。

以上が本書の構成と内容の概略である。さて、以下ではまず、本書の意義について述べさせていただく。

二 本書の意義

本書の意義は、まず中英独の研究文献の網羅的な整理及び未刊行史料をはじめとした膨大な関連資料の収集とその適切

な利用にある。特筆すべきは、中国において初めて、一九一四～一九二二年に日本人によって作成された青島都市計画図を紹介した点である。この計画図をドイツ人作成による一九一〇年の青島市拡大計画とみなしてきた従来の学説を修正した点も高く評価されるべきである。

本書は、従来採られてきた論証の方法及び立場を見直し、より広い射程において再検討した点も、中国都市計画及び発展の研究史上きわめて重要な意義をもつ。すなわち、具体的な都市計画と抽象的な理論や思想、ミクロな都市とマクロな国際国内情勢、静態的な都市計画案と動態的な都市発展を結びつけて、都市建設、都市経済、都市社会などの多様な視点から都市計画史を捉え直したことは本書の方法論上の特徴と言える。

さらに、本書が豊富な史料によっていくつかの新たな視点と見解を提供した点もまた高く評価されるべきである。とりわけ興味深いのは以下の二点である。まず、一八九七～一九三七年の青島都市計画史の研究を通じて、中国現代都市計画の最初の段階を「外的な作用（強制された文明）」と「中国の内在外」の相互作用と特徴づけた点は注目すべき見解である。

次に、青島の都市発展と中国社会の変遷についての詳細な実証研究によって、一九三五年青島都市計画案の背景、内容及び影響を解明した点は従来の中国都市計画史においてはほとんど着目されておらず、新しい視点である。

以上のように、本書には評価されるべき意義ならびに見解が多々ある。にもかかわらず、疑問に残る点がないわけではない。以下では、それらについて率直に述べさせていただく。

三 本書の問題点

本書では、従来の研究が建築史、都市建設史、都市発展史においてドイツ占領期の青島都市建設を中国近代都市計画史の典型として見なしてきたと詳細な研究史の整理なしにアプリアリに指摘している。しかしながら、そもそも、青島を研究対象としたこうした分野の研究が、いかなる分析結果をこれまで導きだしたかについて紹介する必要がある。しかも、著者は従来の青島都市計画の研究の残された課題について論じる際に、二〇世紀前半期の研究動向を踏まえたに過ぎず、最新の動向を踏まえた上でのより詳細な検討が必要では

なかったかと考えられる。

本書では、一八九七―一九三七年の青島研究の時代区分について、「中国通史」、「西洋通史」及び「専門史」に分類して論じている。本書は一九四九年を近代と現代の境界として捉えているため、当該の時代区分を中国近代史の範疇に分類しているといえる。その一方で、「中国通史」と異なつて、「西洋通史」においては、近代史がなくて古代と現代しかないといった著者の指摘は大いに疑問である。なぜならば、内外の西洋史研究においては、西洋史を古代、中世、近世、近代、現代に区分するのが通説だからである。一般的に、近世と近代の境界は市民革命である。それ故、本書では「西洋通史」の時代区分の捉え方は妥当性を欠いているといった疑問が生じる。

本書の第三章では、ドイツ占領下における土地政策が青島の都市発展だけでなく、ドイツ本国を始めとしたヨーロッパ、孫文の平均地権に及ぼした影響を高く評価している。確かに、ここでは、土地政策の主要な内容が概括されているが、実際にはドイツ占領初期の土地法規から何回もの改定を経て青島土地制度に最終的に至っており、この経緯と実態について触

れてほしかった。というのは、読者にドイツ占領時に最初から最後まで一貫した土地政策が実施されたという誤ったイメージを与える恐れがあるからである。土地政策を計画実施の制度的保障として重視するならば、植民地支配の要請及び現地人の反応による政策の改定過程についての更なる説明が欲しいところである。

本書において、ドイツの青島都市計画の先進性は史料をもって十分に実証され、その一方で、こうした計画の二面性についても多少分析がなされている。本書は、青島の都市計画の二面性の分析を通じて近代化の二面性を取り上げてはいるものの、理論的検討の段階にとどまっているに過ぎない。すなわち、ドイツの青島都市計画がその後の中国近代都市計画にいかなるマイナスの影響を及ぼしたかについて、具体的な事例をもって実証的に明らかにすべきではなかったかと考えられる。その際、現地の人びとがその土地政策をいかに受け止めて対応したのかについての事例研究が必要となってくる。著者は脚注で当時のアメリカの歴史学者 Wilson Leon Goddshall の解釈を引用して、ドイツ都市計画のマイナス面を検討しているが、今後の課題として当時の現地の中国人の動

向に関して中国側の史料を用いて検討する必要がある。

おわりに

以上、本書について、主に政治史と植民地史研究及び方法論の視点から論評させていただいた。評者が誤読ないしは誤解しているかもしれないが、その際はご海容いただければ幸いである。本書は中国都市計画史の研究ではあるが、同じく青島という研究対象を扱う評者にも数多くの興味深い見解を提示しており、青島研究にも有益な研究書である。いずれにせよ、本書は中国都市計画史、建築史だけでなく、都市政策史の研究にも多くの示唆を与えており、実際に中国の都市計画に取り組む専門家及び都市の政策担当者にとっても有益であり、中国だけでなく日本の研究者や専門家の方々にぜひともお薦めしたい著作である。